

傘寿から四年の歩み（稿）

所 功

（tokoroi.sao.jp）

※「わが八十年の歩み」追補

を立て共同研究を始めたが、私としては道徳科学研究センターで最後の研究発表となつた。
研究センターより寄贈した宸翰（後水尾天皇・明正女帝・後桜町女帝・光格天皇の宸筆）の展示…その午前、正副理事長から感謝状を頂き、記念館で展示品を解説した。

V期 終 活 期

令和4年（2021） 81歳

・正月12日、道徳科学研究センターに出勤し共同研究『皇室野史』の再発見の中間報告を行う。

※『皇室野史』の研究…廣池千九郎博士（1866）

一九三八年が明治26年（満27歳）京都で「史学普及雑誌」を発行する傍ら、翌年（1893）『皇室野史』を出版された。これは武家時代（中世近世）における皇室と国民の関係を解明しようとした鋭い着眼の労作である。その引証史料を再検証するため、橋本富太郎・久禮旦雄両氏と三年計画

・3月19日、大垣北高の多機能教室寄贈記念式典に出席し、午後、汗青会公開セミナーで講演する。

※寄贈記念式典…母校に寄贈した最新の多機能教室を見学してから、国の紺綏褒章と県の感謝状を頂く式典に出席し、教職員と生徒会役員らと懇談した。

※汗青会セミナー…大垣市スイトピアセンターで第11回セミナーを開き、「梁川星巖と紅蘭—おしどり夫婦の功績」について講述した。橋本秀雄幹事の尽力により講録冊子も発行した（五月）。

・3月31日、モラロジー研究所教授を退任する。

※研究所教授…平成24年4月から十年間在任したモラロジー研究所（令和三年からモラロジー道徳教育財団と改称）の道徳科学教育センター教授（八年間専任、二年間客員）を定年で退任した。
橋本富太郎・久禮旦雄両氏の尽力により『モラロジー研究』八八号で「傘寿記念特集」が組まれ、拙稿「奉職十年の歩み」も掲載された。

学んだ大礼」、楠本祐一氏が「内から支えた大礼」の題で、講述の後、久禮旦雄准教授の司会により質疑応答した。楠本氏は京都西陣生まれ、平成初めに侍従、令和初めに掌典長として大礼に奉仕された貴重な体験を存分に語られた。（『日文研紀要』27号に全容掲載。）

・7月8日、「渡辺允侍従長を偲ぶ会」に参列。

※渡辺允（まこと）元侍従長（85歳）…平成10年（一九九八）に高橋紘氏との共著『皇位繼承』（文春新書）を出す前後から何度も招かれ教示を賜わった同氏は、退職後の同23年（74歳）『天皇家の執事』文春文庫版の後書きに、天皇陛下の御心痛を直叙し、皇族女子が結婚後も皇室に留まる法改正の必要性を明示された。それが実現すれば、満20歳となられた敬宮愛子内親王（3月17日見事な記者会見）などの宮家創立も可能になろう。なお、毎日新聞（3月21日朝刊）に求められ追悼記事を寄せた。

・6月19日、京都産大「むすびわざ館」で「平成と令和の大礼を振り返る」シンポジウムに出講する。

※シンポジウム…同館主催・日文研協賛で「平成」と「令和」の代始諸儀祭礼につき、私が「外から

※**偲ぶ会**…2月9日に他界された渡辺允侍従長を偲ぶ会が、御令嬢姉妹の主催により帝国ホテルで開かれ、直会の席で高橋美佐男上皇職侍従次長・羽毛田信吾元宮内庁長官・鷹司尚武霞会館理事長兼神社本庁統理および皇室取材の雑誌社・新聞社・テレビ局の記者たちと立話した。

その懇談中、安倍晋三元首相（63歳）が奈良市西大寺駅前で演説中に銃撃されて心肺停止の悲報に驚嘆した（夕方六時ころ絶命）。

・8月13日、六月大祓お供えの「真桑瓜」を用いた「真桑瓜アイス」を岐阜JAから上皇職に献上する。

※**六月大祓の供え物**…宮中祭祀の六月末日「大祓」には、御神饌（おすべ）の一部として「白瓜・真桑瓜・茄子」を輪切りにしたものをお供えされるという（高谷朝子元内掌典著『宮中賢所物語』参照）。

この真桑瓜はメロンの一変種で縄文・弥生時代から食物とされ、特に美濃国の真桑村（現本巣市真桑）の産品が著名となり、全国に流布している。

その真桑瓜は、皇居の畑で栽培されているが、平成三十年（二〇一八）十月、皇后の美智子さまは天皇が譲位されたら赤坂御用地でも「マクワウリを作つてみたい」と述べておられる。

※**真桑瓜アイス**…このような真桑瓜を地元から献上してもらえないか、岐阜JAの岩佐哲司会長に相談したところ、JA委託の県立岐阜農林高校で創作した「真桑瓜アイス」は、安全で問題がないこと、それならば上皇職でも受納して頂けることが判り、無事献上の夢が実現した。以後毎年六月末に献上している。

・8月13日、六月大祓お供えの「真桑瓜」を用いた

「真桑瓜アイス」を岐阜JAから上皇職に献上する。

※**六月大祓の供え物**…宮中祭祀の六月末日「大祓」には、御神饌（おすべ）の一部として「白瓜・真桑瓜・茄子」を輪切りにしたものをお供えされるという（高谷朝子元内掌典著『宮中賢所物語』参照）。

この真桑瓜はメロンの一変種で縄文・弥生時代から食物とされ、特に美濃国の真桑村（現本巣市真桑）の産品が著名となり、全国に流布している。

・12月9日、「東京国立博物館百五十年特別展」を拝観。

※**双京構想連続講座**…昨年から市の総合企画局（京都創生室）の依頼により、京都アスニー大ホールでの「双京構想」連続講座を担当した。今年度は「帝王学の教科書」のテーマで①6／19所『宇多天皇の『寛平御遺誠』』、②久禮「順徳天皇の『禁秘抄』」、③久禮「後水尾天皇の『當時年中行

・10月6日、京都市に大垣の有志から「梁川星巖・紅蘭顕彰銘版」寄贈の仲立をする。

※**顕彰銘版**…靈山顕彰会の岐阜県支部に提案して、京都市役所には美濃部竜治氏（産大卒）から働きかけてもらい、京阪神宮前駅出口に「星巖・紅蘭おしどり夫婦」の顕彰銘版（撰文所功、製作児玉製作所）を寄贈する式典と小宴を実施した（門川大作市長ら十数名来席）。

令和5年（二〇二三） 82歳

・3月2日、上野の森美術館で「小灘一紀絵画展」を拝見する。

・10月31日、野田佳彦氏の依頼により、オンラインで皇室典範に関する管見を説明する。

※**野田佳彦氏**…松下政經塾一期生の同氏（64）とは、十数年前に同塾同窓生（国会与野党議員を含む）の勉強会で講演したことがある。その縁によるのか、立憲民主党の「皇位検討委員会」勉強会への出講を求められて、オンラインで管見を述べた。司会進行は馬淵澄夫議員（61）。

・3月11日、母校の小学校に「二宮金次郎像」の説明銘版を寄贈する。

※説明銘版：明治六年（一八七三）創立から一五〇年の母校（現揖斐川町立の小島小学校）校庭隅に昭和十四年（一九三九）寄贈の二宮金次郎石像がある。その説明銘版「勤・儉・讓の報徳に学ぶ」（撰文所功、ステンレス製、京都の児玉製作所作）を同二十五年入学の同級生一同有志で寄贈した。その整地・設営には、校長以下の教員・児童も保護者会役員・同級生有志も協力された。

・3月19日、大垣の汗青会公開セミナーに出講する。

※汗青会公開セミナー：大垣北高の恩師稻川誠一先生（昭和60年3月20日急逝）に学ぶ汗青会の勉強会を一般も自由参加のセミナーとしてきた。今回は「徳川家康の遺訓を見直す」の題で講述した（四月「ぎふの教育」二〇五号に要旨掲載）。

・4月16日、小田原文化財団江之浦測候所の「鎮花祭」に参列し、郷里の「さざれ石」を寄贈する。

※江之浦測候所：現代美術作家（日本藝術院会員・

文化功労者）の杉本博司氏（昭和23年生まれ）が、平成二十九年（二〇一七）小田原市西郊の太平洋水平線を一望できる江之浦に複合文化施設を開設。その広大な苑内の石舞台において開催の「鎮花祭」で杉謙太郎氏のユニークな「演花」と杉本理事長の感動的な講話などがあつた。ここには昨年「春日神社」が勧請され参道も整備中にて、郷里に近い揖斐川町春日の庭置用「さざれ石」（石灰質角礫岩）を寄進させて頂いた。

・6月23日、JAいび川の女性部セミナーに出講し、その機会に小中学校クラブ会にも参加する。

※JAいび川：揖斐郡（揖斐川町・池田町・大野町）全域の農業協同組合。その女性部大学講座に招かれ「徳川家康の家族たち」について話した。

・6月25日、新著『天皇の歴史と法制を見直す』が、藤カントリー倶楽部レストランで会食し歓談した。

・6月25日、新著『天皇の歴史と法制を見直す』が、藤

原書店から出版される。

※新著：6月9日の今上陛下「大婚三十年」奉祝の思いを込めて昨春から書き進めてきたが、校正に手間どり漸く完成した（四六判四三二頁）。その口絵に藤島博文画伯（日展審査員、82歳）の日本画「令和の大嘗宮」を掲載させて頂いた。

※藤原書店：平成元年（一九八九）藤原良雄社長により創立された出版社。平成24年（二〇一二）市村真一博士著『皇室典範を改正しなければ、宮家が無くなる』所収の対談に参上し編集を手伝った縁もあって、本書の刊行を引き受けられた。

・8月2日、皇學館大学国史学科十期生とコロナ禍で二年遅れの傘寿と稀寿を祝う会に出席する。

尚、満27歳で「未亡人」となった母は、平成十九年（二〇〇七）七月十日、満91歳寸前で往生したが、それ以来笑顔の遺影を居間にても掲げている。

・9月15日・16日、京都アスニーの連続講座と揖斐川町の「学ぶ集い」に出講する。

※京都アスニーの連続講座：「双京構想」を推進する京都アスニーでの連続講座は、今年度「京都ゆかりの歴代天皇」という通しテーマで、初回（8月4日）「平安前期の天皇と京都」、第三回（9月15日）「鎌倉・南北朝期の天皇と京都」、第五回（10月27日）「東京時代の天皇と京都」を担当した。

※ 捐斐川町の「広木忠信に学ぶ集い」…広木忠信（文蔵）の遺徳を偲び郷里の文化を学ぶ有志の集い

を昭和五十六年（一九八一）から始め、十年後の平成三年（一九九一）から町文化財保護協会の主催とし、捐斐川歴史民俗資料館で開催してきた。

その参加者が年々多くなったので、今回から捐斐川町民交流センター（はなももホール）を会場とし、町長・教育長も出席された。拙講テーマは「春日局（つぼね）ゆかりの捐斐川町と小田原市」。

・ 11月25日、名古屋大学文学部の創立七十五周年記念行事に参列する。

※ 名古屋大学文学部の創立記念：本学は昭和14年

（一九三九）最後（七番目）の帝国大学として創設されたが、文学部と法経学部が創立されたのは同23年（一九四八）である。それから七十五年を記念しての式典に国史出身の友らと参列し、記念講演も聴講した。

なお、この機会に文学部図書室の設備を充実す

るために若干の特別寄付をした。

・ 12月9日、大阪の國民會館大ホールで「生誕百年の田中卓博士に学ぶ集い」を開催する（一年後、その全容を出版）。

※ 「学ぶ集い」…田中卓博士は、平成30年（一〇一八）11月24日に95歳寸前で帰幽された（前記）。その長逝から五年後の本年が生誕百年の節目にあたるので、國民會館（武藤会長）の理解と数名の協力をえて博士に学ぶ集いを開催した（講師は武藤治太・岡田登・清水潔・若井勲夫と私。進行司会は野崎眞夫・橋本秀雄の両氏）。

※ 全容の出版：その全容は、武藤会長の高配により、事務局と野木邦夫の尽力を得て、翌6年11月24日「國民會館叢書」別冊（A5判一四〇頁）として刊行し、四百名近くに寄贈・頒布した。

令和6年（一〇二四） 83歳

・ 正月6日、「皇族の確保」に関する政府案を国会の与

野党で協議している動静に注目し、ホームページなどに管見を出し続け、冊子『皇族の確保』急務所見』を自費出版する。

※ 政府案：平成29年（一〇一七）天皇の高齢による譲位を可能にする「皇室典範特例法」を制定した際の「付帶決議」を承けて「安定的な皇位継承」と速かな「女性宮家の創設」に関して検討する有識者会議の報告に基づいた応急の案が作成され、政府（岸田文雄首相）から国会（与野党・会派）に協議を求めた。

それは皇位継承問題を棚上げして、「皇族の確保」方策のみに絞り、I 皇族女子が結婚後も皇族の身分に留まりうるようにすること。II 旧宮家の男系男子が皇族として皇室に入りうるようにすること。III 旧宮家の血縁者を現皇室と別に皇族とすること、の三点から成る。

それをホームページで八月まで論じた二十篇と

令和三年（一〇二二）の有識者会議ヒアリング記録、および他紙誌の取材に応じた六篇を併せ、『皇族の確保』急務所見』と題する冊子（A5判一六四頁）を自費出版し、関係各位に贈呈した。

・ 2月13日、杉浦重剛翁の百年祭により、伝通院へ御遺族と共に御墓へ詣り、御遺品などを見せて頂く。

※ 百年祭：杉浦重剛（号「梅窓」「天台道士」）は、百年前の大正十三年（一九二四）二月十三日、満68歳で他界し、菩提寺の伝通院（小石川、浄土宗）に葬られた。以後ご遺族（現当主は曾孫重利氏）と「日本中学校」（現在「日本中学・高等学校」）の同窓生などにより「梅窓祭」が行なわれており、私も昨年から参列している。

※ 冊子『皇族の確保』急務所見』…のうち、管見ではIを是認するが、IIも默認し、IIIは否認する。

ただ、Iの案で皇族女子を当主とする新宮家に入

※ 御遺品：杉浦翁の資料は殆ど日本中学・高等学校

に寄贈保管されているが、『遺族のもとにある揮毫の色紙や貴重な写真を拝見させていただいた。

なお、この機会に平成二十一年（二〇〇九）に編刊したものと補訂改装して、七月末『教育勅語

「少年昭和天皇への進講録』（四六判一七四頁。

杉浦重剛著・所功解説、勉誠社）を出版した。

・3月17日、白鳥神楽保存会から委嘱された『白鳥の歩み』の編集会議に出た後、汗青会の公開セミナーでその中間報告を行う。

※白鳥神楽保存会：郷里に近い揖斐郡池田町の白鳥

神社（主祭神倭建命）には、江戸時代から獅子舞の神楽が盛んで、今も春秋の例祭に悪魔祓などを奉仕している。その保存会長河本克己氏は、私の母方の分家当主である。また同会役員の高崎美恵子様は「白鳥奉燈狂俳保存会」の会長でもある。

※『白鳥の歩み』：この機会に「白鳥神楽の由来」だけでなく、「白鳥地区の来歴」と「白鳥神社の由緒」および「白鳥狂俳の奉燈」についても可能

・7月12日、京都アスニーの連続講座に出講した際、古書店から購入予定の鈴鹿家旧蔵文書を確認する。

※連続講座：今年度はNHK大河ドラマ「光る君」にちなんで、「皇室と貴族の関係」を通しテーマとして、その初回「平安中期の朝廷と摂関家」を担当した。

※鈴鹿家旧蔵文書：京都の思文閣出版の古書目録で知った文書群のうち、江戸時代の鈴鹿家が奉仕した大嘗祭関係史料を私費で一括購入して、皇學館大学の神道博物館に寄贈した。

・9月28日・29日、揖斐郡大野町「文化財保存協会」の記念講演に参り、翌日揖斐川町の「広木忠信に学ぶ集い」で講述する。

※文化財保存協会：大野町では同会の創立五十年を迎えて、杉原重明会長（汗青会同学）の依頼により町民センターで「近世大野における学問と教育の再発見」について講演した。

翌日、揖斐川町の交流センターで「昭和天皇から三代続く谷汲行幸啓」について講述した。

・10月5日、九月刊行の新著『天皇学』入門セミナーをふまとて、國民會館の東京講座で「天皇史から『天皇学』への展望」について講述する。

※新著：平成二十一年（二〇〇九）モラロジー研究

所から出版した『歴代天皇の実像』の本文を全面

的に更新し、久禮旦雄氏に近年の研究動向を「補注」して加えてもらい、藤原書店から刊行した。

※『天皇学』：拙著の中心は「天皇史」であるが、

藤原社長の提案により「天皇学」という壮大な新語を掲げた。その発展構想と最近の皇室問題を、東京の国際文化会館で開催された講座で論述し、要旨を國民會館のメールマガジンに掲載した。

※植村和秀新会長：同氏は（京都産業大学教授）は、

な限り調べ、九月の例祭までに冊子『白鳥の歩み』（B5判一四頁）を仕上げて奉納した。その口絵には小瀧一紀画伯（80歳）作「ヤマトタケル」を掲載させて頂いた。

京都大学法学部出身の政治思想研究者で、平成十六年（二〇〇四）『丸山眞男と平泉澄』（柏書房）を出版し、同二十六年の藝林会学術大会では『滯欧研究日記にみる平泉澄博士』について研究発表された（全文『藝林』六四巻一号所載）。そのような縁で隆房会長から副会長を委嘱され、今回新会長就任を承諾された。

※**日本学協会の役員**：当会は昭和三十一年（一九五六）文部省学術局所管の一般財団法人として設立された。その理事長は、このたび平泉澄博士の曾孫紀房氏（金沢工業大学講師）が就任された。

なお、国際的な経済学者の市村眞一博士は、長らく日本学協会の顧問を務め、会誌『日本』（月刊）の編集にも尽力されてきたが、今年七月三日長逝された（満99歳）。

11月24日、「都草」の「京都御所・御苑歴史散策ツアー」ガイド十周年記念講演を行う。

※「都草」：平成十六年（二〇〇四）から京都商工

・12月25日、本日は大正天皇（77歳）の崩御により、皇太子で摂政の裕仁親王が践祚されてから九十九年目。この機会に春から「昭和天皇記念館」をリニューアルする寄附金の募集事業が行われ、賛助する。

※**昭和天皇記念館**：昭和天皇の在位五十年に設置された「国営昭和記念公園」（立川市）の一角にその管理事務所長の御苑紹介もあった。

御事績を広く伝えるため、平成十七年（二〇〇七）この記念館が創建された。

※**募金事業**：この記念館を二十年後の来年（昭和百年）に大改修するため、クラウドファンディングにより寄附を募ることになり、梶田明宏氏（現館長、『昭和天皇実録』編纂官）から依頼を受け、呼びかけ文を寄せ応分の協賛をした。

令和7年（二〇二五） 84歳

・正月1日、今年から年賀葉書を止め、メール交換の可能な方々のみに年賀メールを出すことにする。

※**年賀メール**：「『終活』の充実」と題して送信。「はや日本人の平均寿命を越えましたが、今のところ健康に恵まれていますので、先般来『終活』を心がけています。

それは単に最期の備えだけでなく、自宅の蔵書

（大半は研究所に寄贈済み）や資料（来信・切り抜き・コピー等）を分別・処理すると共に、残したものを利用し新しい情報を集めて、現在と将来

会議所主催の「京都検定」上級合格者を中心に、京都の歴史・文化を学ぶ会として作られたNPO法人である。その有志たちが、京都御所と京都御苑を案内するボランティア活動を続けている。

※**記念講演**：京都産業大学在職中、京都検定の一級合格者を日本文化研究所で受け入れ、私も研究サポートしてきた。その縁で「都草」初代会長坂本孝志氏に依頼され、立命館大学朱雀キャンパスホールにおいて「京都御苑の真価をみんなで再発見」と題し講述した。その前に文化庁の今泉柔剛審議官などの祝辞があり、環境省の小口陽介京都御苑管理事務所長の御苑紹介もあった。

・3月29日、清水潔氏の叙勲祝賀会（松阪）に参列し、

また田中卓先生の墓に詣る。

※祝賀会：清水潔氏は、昭和四十二年（一九六七）皇學館大学へ入学し、田中卓教授（44）に師事するため「伊勢青々塾」へ通い入塾した。当時大学の助手で塾の塾頭代だった私（25）は、以後半世纪余り親交を重ねてきた。同氏は、平成二十三年（二〇一一）から八年間同大学の学長を務め、その後も学事顧問として貢献する功績などにより「瑞宝中綬章」の叙勲を授かった。それを有志で祝賀するため、発起人の年長者として祝辞を述べた。

その夕方、十期生で元大学事務局長の西谷豊氏（72）と最後の塾生野木邦夫氏（53）と共に、伊勢の内宮近くにある田中家の御墓に詣り、御宅で元気な奥様に面談することができた。

・4月6日、小田原駅近くで季刊誌『和合』の関係者から長時間の取材を受ける。

※季刊誌『和合』：「神道と“和”の情報誌」とし

経て上京し、東京師範学校を首席で通して学習院の教授に抜擢された。

しかも、明治二十二年（一八九五）から皇太子嘉仁親王の御養育掛、ついで同三十七年から皇孫裕仁親王の御養育掛を拝命した。やがて大正四年（一九一五）皇子御養育掛長を退任後も裕仁皇子の御所へ再三招かれたが、同十四年（一九二五）五月五日、七十歳で他界。

それから満百年の今春、岐阜の有志（従弟の橋本秀雄氏など）が丸尾家の御子孫と連携し、日本学協会の月例「現代国民講座」として、郷土の先賢を偲ぶ集いを開催することができた。

・7月30日、徳富蘇峰の遺著『国史より観たる皇室』に注解を加えて出版する。

※『国史より観たる皇室』：明治以来の論壇で活躍し「稀代のジャーナリスト」と称される徳富蘇峰（一八六三～一九五七）は、敗戦後GHQの公職追放を受けながら、昭和二十一年二月（83）一氣

て平成二十三年秋に創刊された（神社本庁・神宮司府協力）本誌の依頼により、皇室の文化と神道の常識について、「万人のお宮奉仕」代表の塙田昌久氏を相手に三時間近く話した。それに若干加筆した全容が、55号・56号・57号に連載されている。

・4月29日、「昭和の日」にちなみ「産経新聞」が「御製で振り返る昭和天皇」を特集するにあたり、その企画に全面協力する。

※「昭和天皇」特集：『産経新聞』は正月から特集「昭和一〇〇年あのとき」を連載中であるが、それに加えて文化部篠原記者から依頼され、「昭和の日」に御製と写真を全紙二面に掲載する企画の選歌と解説を手伝った。

・5月6日、岐阜の「現代国民講座」で「丸尾錦作先生百年記念」の会合が開催され、記念講演を行う。

※丸尾錦作先生：安政三年（一八五六）加納（現岐阜市内）藩士の家に生まれ、地元の小学校教員を

に本書を書き上げた。しかし、容易に公刊しえず、講和独立の翌年（一九五二）湊川神社の藤巻正之宮司により自費出版して知友に寄贈したに留まる。そこで、かねて蘇峰に関心をもつ私は、今回それを読み易くして語注を加え、さらに同二十八年、蘇峰翁（90）が来訪した青年（麻布高校教諭近藤啓吾氏（30）など）に語った記録「日本の行くべき道」も付載して、藤原書店から出版した。

・8月1日、京都市のアスニー「双京構想連続講座」で本年度初回を担当し、「明治初期の京都博覧会と平安建都千百年記念の博覧会」につき講述する。

※アスニー講座：今年度は大阪夢洲で開催の「EXPO 2025」日本国際博覧会にちなみ、明治から昭和まで京都において開催された博覧会を五人で分担し紹介した。

・8月13日、昭和天皇記念館で有志が開催した「昭和天皇に学ぶ」懇談会に、オンラインで参加する。

※「昭和天皇に学ぶ」：友人の和田直也氏（岐阜市議会議長）が、地元有志と立川市の昭和天皇記念館を訪ね、梶田明宏館長（岐阜市出身）のご尽力で懇談会を開催した。

そこで、平成元年二月、昭和天皇の大喪の礼を特別中継した際、担当した当時ＮＨＫアナウンサー橋本大二郎氏（のち高知県知事）の相手を務めた縁により、二人で基調講話と対談をした。

・8月15日、全国戦没者追悼式が国立武道館で行われ、皇后陛下と共にご臨席の天皇陛下が「お言葉」を捧げられる。岐阜では「遺書パネル展」が行われる。

※追悼式の「お言葉」：全国戦没者追悼式は、講和独立の昭和二十七年（一九五七）から行われ、その際の昭和天皇の「お言葉」が基本的に毎年受け継がれている。それが今年は「戦後八十年」にあたって特別に注目され、「読売新聞」の取材に応えた所感が八月二十八日掲載された。

※「遺書パネル展」：岐阜の若い有志たちが「終戦

和泉様が、宝物館に別置されていた木箱（表に澄先生が「蘇峰先生」と墨書）を社務所の応接間で見せて下さったのみならず、全文の写真撮影を行なう朝日印刷（社長）に指示された。その上、別途お願いしていた『禁秘抄』の古写本（現存最古の鎌倉末期に書写された三条西家旧蔵本）も、宝物館から搜し出し、同様に撮影の手配までされたのは、感謝にたえない。

・9月5日、「礼典研究会」総会の記念講演で「杉浦重剛先生の『実践躬行』に学ぶ」と題して話す。

※「礼典研究会」：近代的な神社礼法の基礎を築いた青戸波江大人（一八五七～一九二九）の学統を継ぐ有志の会（現会長茂木貞純國學院大學名譽教授）が、今年度は靖国会館において行われた。

※杉浦重剛（一八五五～一九二四）：大正三年（一九一四）から皇太子裕仁親王のために「東宮御学問所」で「倫理」担当の御用掛を務めた。その在

八〇年感謝の心をつなぐ実行委員会」の企画として「岐阜県出身戦没者のご遺書パネル（動画も）」を作り、県内各地で展示した。その中に父所久雄の遺書も含まれている（年末に出版予定）。

・8月24日、平泉寺白山神社へ史料拝見のために知友四名と共に参上する。

※史料拝見：徳富蘇峰翁と平泉澄博士は、戦前から親交があり、特に戦後お二人とも公職追放を受けたが、手紙の交換により互いを励ました。

その往復書簡が多数現存する。平泉博士から蘇峰あての二十数通は小田原市国府津に近い二宮町の「徳富蘇峰記念館」にあり、全て写真を領けて頂いた。もう一方の蘇峰翁から平泉博士あての十数通は、平泉寺白山神社の宝物館に所蔵される。そこで、後者を直接拝見するため、藤原書店の藤原良雄社長、帝京大学教授の野口剛氏、日本学協会研究員の野木邦夫氏と共に参上した。

当日は、昨夏急逝された平泉隆房前宮司の夫人

また大正九年（申）末から翌十年（酉）二月の「宮中某重大事件」に関して門弟の猪狩又藏氏が纏めた『申酉録』（未刊）がある。この両記録を精査して、杉浦翁が二歳下の青戸翁を信頼し、御学問所の御進講準備にも、皇太子妃（良子女王）の内定問題にも、常に相談して真剣に取り組んだ経緯を論述した。

・9月6日、悠仁親王の「成年式」にあたって、日本テレビと読売・時事通信・A E R Aなどからの取材が放映・掲載される。

※悠仁親王の「成年式」：皇嗣秋篠宮文仁親王の長男悠仁親王は、昨年満十八歳で成年を迎えたが、高校在学中のため延期して大学進学後の御誕生日に皇居宮殿で「成年式」が執り行われた。

この機会に「親王成年式の来歴と課題」を纏め、『産大法学』五九巻三号に寄稿した。

・9月20日、揖斐川町の「広木忠信に学ぶ集い」で講

述。夜、岐阜「ニューモラルの会」でも講話。

※「広木忠信に学ぶ集い」：この会合は今年も揖斐川町文化財保護協会の主催より町民交流センターで行われた。その来賓挨拶で町教育長から、二年程前、町教委の外部評価委員長を務めた私が町の将来を見据えて纏めた意見書の実現に取り組んでいる、と謝辞を述べられ恐縮した。

・10月7日、宮内庁編『香淳皇后実録』の全文が公開される。『産経新聞』から依頼を受け、その全文コピーを事前に拾い読みした所感が、本日と十六日に詳しく掲載される。

※『香淳皇后実録』：平成二十六年（二〇一四）完成奉呈された『昭和天皇実録』に続き、香淳皇后（一九〇三～二〇〇〇）の実録も完成奉呈された。

その全十巻データのコピーを、宮内記者の内田優作氏から送られてきたので、二週間ほどで通覽してコメントした。その後、あらためて全文精読して、ご幼少期から夫君践祚まで約二十年間のご

難な収骨と慰靈を毎年継続している。

・11月9日、藝林会の学術研究大会を京都産業大学の「むすびわざ館」で開催し、開会の挨拶と研究発表を行う。

※学術研究大会：今年の題はテーマ「御撰・御集をめぐる諸問題」のもとに、私が「宇多天皇の御記と御遺誠」、小林一彦教授が「後鳥羽上皇が手塩にかけた『新古今和歌集』」、盛田帝子氏「近世中後期の御所伝授をめぐって」につき研究発表を行い、久禮旦雄教授の司会による相互討論で若松正志教授が三者へのコメントと江戸前期の後西天皇の事績紹介などもあり、実り多い会となつた。

・11月17～22日、敬宮愛子内親王がラオス共和国を公式訪問され、皇族女子による公的活動の重要性を広く印象づけられる。

※皇族女子の公的活動：内廷皇族の敬宮愛子内親王

修学関係の記事を抄出した。また夫君の晩年（昭和六十二年）までに詠まれた御歌も抄出して、理解を深めることができた（御歌抄五十首は『日本』新年号に掲載予定）。

・10月26日、靖国神社と市ヶ谷のホテルで開かれた「全国ソロモン会」創立六十周年記念の集いに参列し、顧問として祝辞を述べる。

※全国ソロモン会：南洋ソロモン諸島で健闘して生還した戦友たちにより、昭和四十年（一九六五）創立され、同会の有志が毎年自費で亡き戦友の遺骨収集と慰靈参拝へ出かれるようになつた。

私は同四十七年七月、その一行に途中（ガダルカナル島）まで加えてもらい、父が戦死した隣のニュージア島へ詣ることができた。

その後、陸軍・海軍の戦友会は、高齢化で殆ど解散された。しかし、本会は平成後半から壯年の崎津寄光氏（浅草寿仙院住職）が事務局を引き受け、笹幸恵さん（広報担当）などと協力して、困

（12月1日で24歳）は、昨春学習院大学を卒業されて日本赤十字社に勤務しながら、国内各地への視察や大会への臨席に精励されてきたが、今回初めて単身で海外訪問の大任を果たされた。

それに先立つて朝日新聞社から取材を受けた。AERA10月27日号の特集「女性が輝く皇室に」、また本紙11月15日朝刊に「女性皇族が紡ぐ海外との絆」にコメントが掲載されている。

なお、宮家皇族の彬子女王（12月20日で44歳）は、昨年十一月祖母崇仁親王妃百合子様の長逝以来、三笠宮家の当主代を務めて来られたが、今年九月三十日、皇室経済会議で正式に当主として認定された（これで同家は現行典範のもとでも初の女性宮家となつたことになる）。

同殿下は、平成二十七年度から京都産業大学の特別教授として日本文化研究所の研究員を務め、今年十一月二十九日、同研究所創設三十年の記念講話を行われた。